

ゴマサバ



生態的特徴等

【生態】

日本周辺に広く分布しており、近縁種のマサバに比べて暖水性、沖合性が強いとされ、太平洋側の成魚の主分布域は黒潮周辺域である。マサバと同様に季節により大きく回遊する群れの他に、黒潮周辺の沿岸域に周年分布する群も多く、各地先漁業の対象となっている。仔稚魚は主に動物プランクトンやイワシ類の仔魚（シラス）などを捕食し、幼魚期以降はこれらの他に小型魚類やイカ類も餌とする。各年齢の体長は、1歳の夏季には28～31cm、2歳は30～34cm、3歳は33～36cm、4歳は37cm前後で、寿命は6歳程度（図1）。

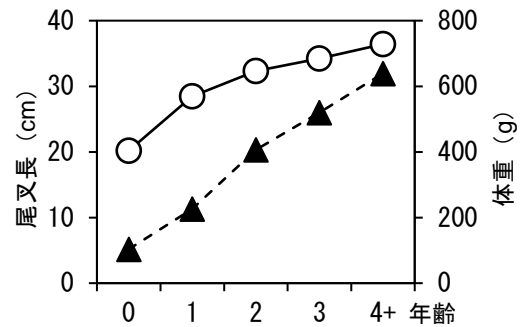


図1 ゴマサバの年齢と成長

(令和7年度ゴマサ太平洋系群バ資源評価書より引用)

【漁法と盛期】

ゴマサバとマサバは外見が極めてよく似ているため、水揚げの際に区別されることはなく、漁獲統計ではサバ類としてまとめて集計されている。茨城県では主にまき網によってマサバとともに漁獲されるが、漁獲量はマサバに比べて少ない。まき網の秋サバ漁では、漁期前半にゴマサバ、後半にマサバが漁獲される傾向がある。定置網でも漁獲されるが、春先など時期によりマサバよりも多く漁獲されることがある。

【利用】

利用法はマサバと同様で、鮮魚のほか、缶詰、塩干品原料として利用される。マサバは秋から冬にかけて脂がのり、味が良くなるのに対して、ゴマサバはマサバよりも体脂肪が少なく、年間を通して味が安定している。

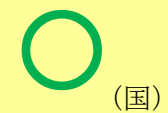
資源水準は中位、動向は増加傾向

(漁獲量) サバ類は、S53年には97万トンを超える漁獲があったが、その後急速に減少し、H3年には5千トンとなった。H25年以降に増加し20万トン程度まで回復したが、R3年以降は減少傾向となり、R6年は1.7万トンとなった（図2）。

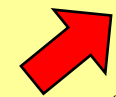
(加入量) H8、H16、H21年に高い加入があった他は比較的安定していたが、H27年以降はそれまでより低い値で推移している。

(水準と動向) 国の資源評価（R7年度）によると、資源水準は「目標管理基準値を下回り、限界管理基準値を上回る」、動向は「増加」とされている（図3）。

水準



動向



(国)

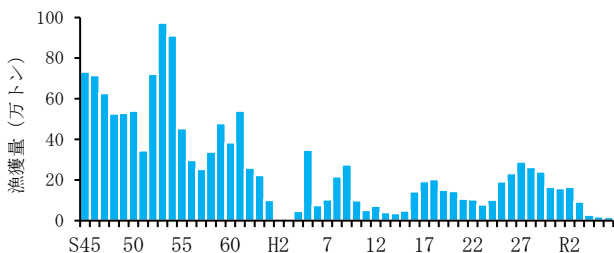


図2 サバ類（マサバ、ゴマサバ）漁獲量^{※1}の推移

※1 千葉県から青森県沖で操業する北部太平洋海区大中型まき網の漁獲量。
年は漁期年（7月～翌年6月）を表す。

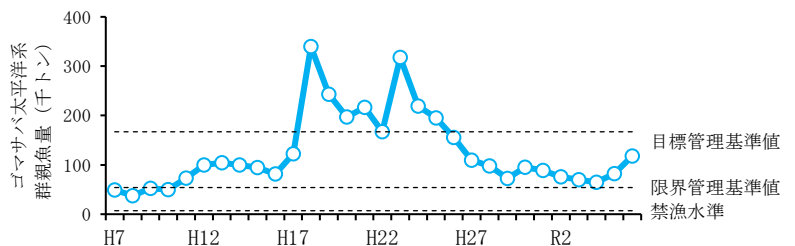


図3 ゴマサバ太平洋系群の親魚量と管理基準値

評価期間：令和6年7月～令和7年6月 更新日：令和8年3月19日

引用：上村泰洋・由上龍嗣・西嶋翔太・古市 生・井須小羊子・渡部亮介・東口胤成・伊澤雄登(2025) 令和7(2025)年度ゴマサバ太平洋系群の資源評価。我が国周辺水域の漁業資源評価。水産庁・水産研究・教育機構，東京，66pp, https://www.fra.go.jp/shigen/fisheries_resources/meeting/stock_assessment_meeting/2025/files/sa2025-sc17/fra-sa2025-sc17-02.pdf.